

が、今なおさまざまな人たちが語りをやめようとはしない。その一つのすばらしい結晶が、本書である。木村の遺した膨大な書物や資料をなんとか後世に伝えるべく、ゆかりのある人たちの手によって愛知県の八事病院に「木村敏記念臨床哲学文庫」が開設され、その記念に論文集が編まれたという。編集の任を負った若き精神科医清水健信氏は、その類まれなる哲学的思索力と学究精神によって、木村の所蔵物のデータ整理を一手に引き受け、さらに、関係の深い第一線の哲学者・精神医学者に声をかけて、本書が誕生するに至った。編集者・文筆家である木村のご子息木村元氏からの寄稿も、人間木村敏が偲ばれ興味深い。

本書は、哲学文庫への寄稿文、論考、エッセイ、資料の4部構成であり、読み進めるごとに、第一級の臨床家であり、精神病理学者であり、哲学者であった木村の仕事が立体的に浮かび上がる構造になっている。しかし、なんといっても圧巻は、4人の論客の手から成る論考である。それぞれがかなり高度で緻密な議論を展開しているが、それは単なる自らの関心領域の探求などではなく、まさに木村敏の厳格な学問姿勢への身を挺しての対峙であり挑戦であることは、それぞれの考察が木村からの触発によって大きく飛躍し、木村との衝突をも辞さない姿勢からも窺うことができる。「(木村が依拠するゲシュタルトクライスは)なおも事態を外から見る見方の残渣を含んではないか」(大橋良介氏)、「筆者はこれら(木村の説く三つの時間様態)に、外に出る運動と内に帰る運動も見たい」(谷徹氏)、「このヴァイツゼカーが、はたして(木村が主張するように)個人の生死を超えた〈死〉のことに考え及ばなかったなどと言えるだろうか」(丸橋裕氏)、「(木村の自由論はイントラ・フェストゥム的な現在の深みに根差しているが)真の自由はむしろ……『非自然の自然』の立場にこそ求められるのではないか」(清水健信氏)、など。

少し木村思想に馴染みのある読者には、重量級の刺激が与えられるだろうし、木村とはじめて出会う読者は、この熱い読書体験によって関心を持ったところから木村に触れていくのもいいだろう。臨床家であれば、本書に散りばめられた数々のメッセージが、必ずやそれぞれの日常を一段深く眼差すきっかけを与えてくれるに違いない。

臨床と哲学のあいだ

木村敏とドイツの現象学・人間学

木村敏記念臨床哲学文庫＋日独文化研究所監修

清水健信編

晃洋書房、A5判196頁、3,740円、2026年1月刊

(のまこころクリニック／京都大学大学院教育学研究科)

野間俊一

誰かの死に際し、その人からなんらかの影響を受けた者は、何かを語らずにはいられないものである。それは、自然に湧き出る謝意かもしれない。まだまだ教えを請いたいという惜別の情かもしれない。あるいは、いつかその人に伝えたいと心に秘めていた想いなのかもしれない。それが、いわゆる巨匠の死であるならば、多くの人たちがその人を悼み、その人を巡ってさまざまな言葉が発せられることは、必然なのだろう。

木村敏の死からもうすぐ5年が経とうとしている